

の言葉を借りれば、「リベラル・キャピタリズムが絶望的な妥協を余儀なくされた」プロセスであり、著者はこのプロセスを丹念に辿っていく。それは自国の理念の後退に苦悩しながら、リベラル・キャピタリズムに反するコミットへと傾斜するアメリカの悲劇の記録でもある。

実のところ、本書にベトナム戦へのアメリカの介入の直接的起源の説明を期待しすぎると、若干の失望感を味わうかもしれない。この問題を論じるには欠かせぬジュネーブ会議や当時の国務長官ジョン・F・ダレスについての言及もほんの申し訳程度に過ぎない。それは本書の扱う期間が主に1949年までに限定されていることにもよる。しかし、東南アジアの重要性がアメリカの政策担当者の思考に急速に浮上する様子が克明に語られており、その後の本格的介入を予感させるに十分である。

ところでロッターの主張や結論には周知のものが少なくない。西側の復興および共産主義との対決という要請の前に、アメリカがリベラル・キャピタリズムに反する諸原理——コロニアリズム、独裁制、経済保護主義、地域主義——を甘受するに至ったとの指摘もその一例であり、これまでの類書によって我々は或る程度知っている。本書の貢献はむしろこうした論点を、アメリカの政策形成過程に及んだ複雑多岐な作用因の緻密な検証とその手際よい整理とを通じて、分厚く裏付けした点に求められるのである。

そうした中で、やや繰返しになるが、大戦直後のイギリス労働党政府が国内では緊縮財政をしきつつも、国外では三角貿易再建のために、いかに金と努力を惜し気もなく注ぎ込んだか、のくどりは新鮮な発掘と言うことができる。その過程で、イギリスがアメリカに世界的な経済責任、東南アジアへの積極的関与を粘り強く説得する事実がこと細かに浮き彫りにされ、改めて戦後東南アジアとイギリスの関係への興味をかきたててくれる。

本書は戦後の東南アジアが、国際政治経済、冷戦構造、大国の利害などに密接不可分に連関されていたことを教えてくれる労作であるが、他面で著者が1950年頃までのアメリカの対外政策に占める東南アジアの重要性をやや強調しすぎるふしが

いささか気になる。多少割引いて読む必要があろう。

またアメリカのコミットに対する当の東南アジア諸国の反応への言及が不十分である。ハノイ、北京、モスクワといった共産陣営の動向の説明も不足している。イギリスの対マラヤ政策と他の英領（例えばビルマ、インド）への政策の異同についての説明も乏しい。著者は専ら西欧および日本との関係から、アメリカの東南アジア関与を理解しようと試みているようだが、以上のような説明が不足しているのは、専ら冷戦の一方の当事者の東南アジア認識が判るだけで、実像としての東南アジアが見えてこない。

こうした幾つかの難点はあるにせよ、本書が東南アジア現代史研究者だけでなく、広く戦後国際政治史に関心を寄せる者にとって得るところの多い好著であることは間違いない。ちなみに著者はコーネル大学出身で、現在ヴァンダービルト大学歴史学助教授。過去の業績についてはほぼ同様のトピックを扱った Ph. D. 論文以外寡聞にして知り得ないが、今後の著者の研究進展を少なからず期待させる作品ではある。

(木之内秀彦・東南ア研)

Earl of Cranbrook, ed. *Malaysia*.
Oxford: Pergamon Press, 1988, x + 317 p.

観光案内書のようなタイトルだが、半島マレーシアの森林とその森林内に分布・生育する動植物相について、多数の研究者が、それぞれ専門とする分野・分類群についてまとめた本である。

構成から紹介する。全体は18章からなる。

第1章で、気候・土壌・地質など、半島マレーシアの物理環境について、まず、記述している。第2章は、T. C. Whitmore が担当する森林型についての章である。半島マレーシアの森林を9タイプの群系に分け、構造、構成種を説明している。以下第10章までが、いわば森林植物編であり、半島マレーシアの森林を構成する、フタバガキ類（第3章）、ヤシ（第4章）、タケ（第5章）、草本類（第6章）、シダ（第7章）、高等菌類（第8章）、木本一般（第9章）についての章がならぶ。

第10章は、やや趣が異なり、マレーシアの森林経営の、主に史的展開について述べられている。

第11章からが、森林動物編になる。哺乳類については、多様性と進化(第11章)、分布と生態(第12章)について独立した章を設けている。以下、鳥類(第13章)、シロアリ(第14章)、森林棲鱗翅目(第15章)、淡水生物(第16章)、の章がつづき、第17章では動物保護の戦略について論じる。

最終章の章題は「森の人々」。オラン・アスリの生活と彼らの環境への影響を扱っている。East-West CentreのT. Ramboの担当である。

構成から明らかなように、バラツキはあるものの動植物のかなり広範な分類群がカバーされている。また、担当の研究者の専門とする分野によって、あるいは対象とする分類群によって、視点は、分類、分布、生態的機能、多様性と違っているが、全章を通読することにより半島マレーシアの動植物相全般についての理解が得られるように配慮されている。

本書と同じシリーズで、ガラパゴス諸島、アマゾン、マダガスカルを対象地域とした姉妹書がすでに出版されているが、熱帯を中心に、特定の地域の動植物相と環境の関係を扱った論文集あるいは資料集成は、80年代の後半から多くみられるようになっている。

東南アジアに関しては、類書として、Anthony Whittenを中心とするスタッフが、Gadja Mada University Pressから出した、*The Ecology of Sumatra* (1984)、*The Ecology of Sulawesi* (1987)を挙げることができる。このグループは、さらに*The Ecology of Kalimantan*の出版も準備中らしい。

このような広義のエコロジーを地域単位で集大成しようとする動きは、近年の環境と開発の問題と無縁ではない。自然保護の最適戦略をたてる上で、また環境への影響の少ない合理的な天然資源の利用をはかる上で、まず、対象地域の動植物の分布・生態に関する包括的理解が重要になってくる。熱帯地域の生態系に関してとくに関心が払われているのは、このような地域こそが、いままさに、急激な乱開発・環境破壊の危機にあるからにほかならない。

60年代以降は、熱帯地域においても、分類学・生物地理学、生理・生態学、行動学などの諸分野で調査研究が急速にすすんでおり、新たな知識、情報が蓄積されている。ところがこのような一次情報は、専門の学術雑誌、報告書に個別に発表されることが多く、分野を限っても、関連する文献を集めるのは容易でなくなっている。まして、幅広い分野・分類群が対象となる地域のエコロジーである。膨大な文献・資料を渉猟し、二次資料に統合する作業が必要となってくる。本書が企画され、意図している点はそこにある。

それぞれの専門家が、信頼できる文献にあたったレビューである。一つ一つの記述・内容についてとやかく評することはないが、あえて指摘するとすれば次の2点である。

まず、第1点は、各章ごとにまとまりすぎている、という印象を受けることである。この種のレビューは、しばしば地域の動植物相に関するビブリオグラフィーとして役立つ。*The Ecology of Sumatra* やその姉妹書を、そのように利用している研究者は多いのではないだろうか。この点本書は、文献の選考・取捨に担当した研究者の興味、関心がそのまま反映されており、よくまとまっている反面、参照・引用している文献にかたよりを生じている。少数のスタッフが専門をこえて作業にあたった*The Ecology of Sumatra* などの方が文献に関してはよく網羅されている。

第2点は、動植物の分布・生態を、人為による攪乱のない、いわゆる自然の状況下でのみ扱っていることである。本シリーズの謳い文句に、環境の急激な変化に対する自然保護活動の理論的根拠をもとめること、とある。とすれば、天然林での研究ばかりでなく、人為の影響を受けた2次林での研究も多くとりあげたほうがよかったのではないだろうか。つまり、人為的な攪乱、環境破壊に対して、個々の種がどのように反応し、分布を変えていったのか、その結果、動植物相がどう変化したのか、さらには、攪乱のあとどのように動植物相が再生・回復してゆくのか、そのような動的研究の成果に、環境すなわち生態系の保全を考える上でのヒントが多くあるように思える。

(阿部健一・東南ア研)